



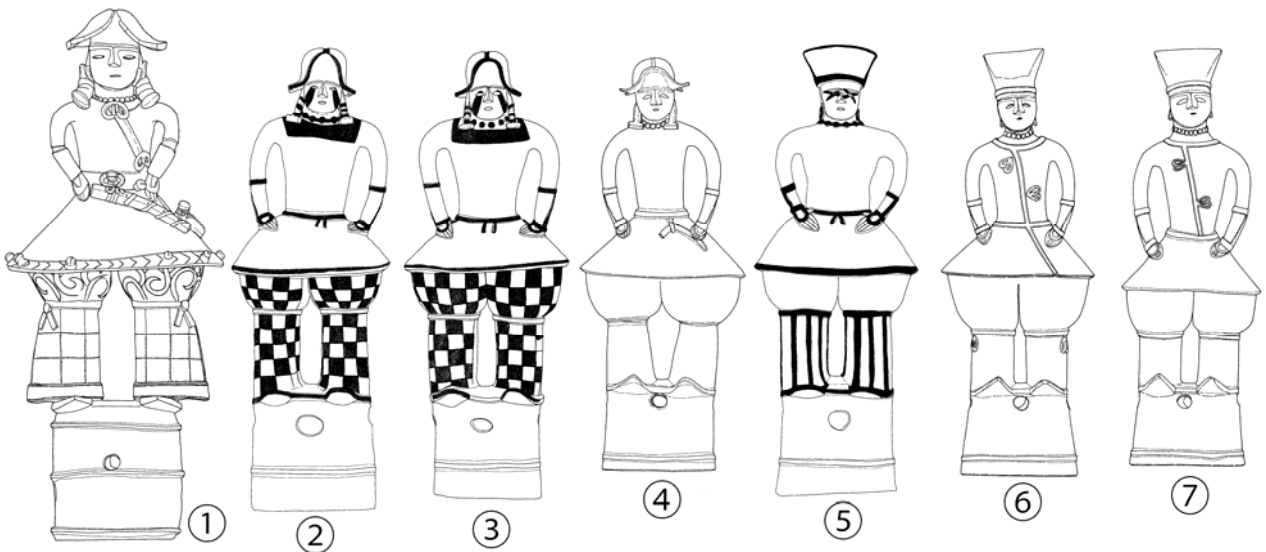
# 今月のミニ展示コーナー 解説シート

## 【展示のテーマ】

古墳時代後期後半（6世紀後半頃）、市原の古墳には地域外でつくられた埴輪が並べられるようになりました。同時期には、石室用の石材や古墳のかたちなど、共通する古墳のパーツが関東各地で広く認められるようになります。その背景には社会の動きがあったようです。

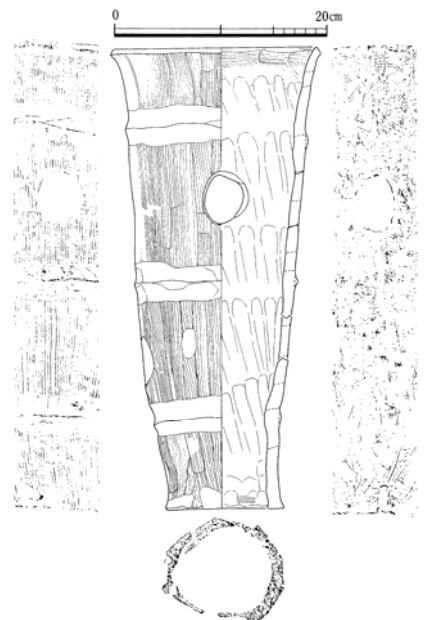
【生出塚窯産埴輪】 西広6丁目にあった山倉1号墳の埴輪は、埼玉県鴻巣市生出塚遺跡の窯から供給されたものです。直線で80kmを超える距離を河川など水上交通を利用してはるばる運ばれてきました。生出塚遺跡に残された埴輪とそっくりです。（右端埴輪高さ約1.2m）

【①群馬県高崎市綿貫観音山古墳、②③⑤生出塚遺跡、④⑥⑦山倉1号墳】各報告書より



【下総型埴輪】（右図） 潤井戸のこやつ小谷1号墳の墳丘に並べられたのは「下総型」と呼ばれる埴輪で、今の印旛沼・利根川下流域にあった内海「香取海」沿岸を中心に分布するものです。小谷1号墳は、山倉1号墳と同じ頃に築かれたにも関わらず、産地の違う別系統の埴輪が採用されました。

両古墳で在地の埴輪が選ばれなかったのは、市原周辺で埴輪づくりが行われなくなっていたことが理由のひとつです。





【磯石】(写真) 君塚クワノ木古墳の石室には、穿孔性の貝が棲んだ穴のある石材が使われていました。この石材は磯石と呼ばれ、鋸山周辺の海岸で採れます(現在も見られます)。



生出塚窯産埴輪が伴う山倉1号墳の石室にも使われています。

この石材は、房総にとどまらず、東京都葛飾区柴又八幡神社古墳や同北区赤羽台4号墳、埼玉県行田市にある埼玉古墳群の將軍山古墳の石室など、遠くへ運ばれたことが確認されています。

【古墳の「パーツ」と流通】 古墳に用いられる埴輪や石材が広い範囲で流通する現象は、一見すると、商売みたいにそれぞれの生産地が出荷先を広げたようにも思えます。しかし埴輪を並べ、石室を設けるような古墳は、大規模であったり、権力者の墓と見られる前方後円墳が多く、日用品とは区別して考えるのが妥当です。また、遠くに埴輪を求めた市原周辺では、古墳時代後期後半に埴輪づくりの伝統が失われていたという点も無視できません。

同じ頃の畿内を中心とした王権の政治体制は、金属器生産や窯業技術、馬匹生産などに長けた職能民を、中央豪族の支配領域を超えて統制できるようになっていました。地域ごとの権力者も畿内王権の勢力内部にあり、労働力を提供したり、その結果各地に畿内の先進技術が伝わったり、という状況が見られたようです。関東地方の豪族も、各種の職能民を抱えていたのですが、古墳時代後期に、あたかも広域で分業するような状況になるのは、各地の豪族同士のつながりの強弱という側面だけではなく、王権内の職能民統制の動向にも大きく影響を受けていたようです。つまり、広域で古墳の「パーツ」をやりとりするようになるのは、単に豪族同士の結びつきだけによるものではなく、王権で進められた生産部門の総合的な把握による「合理化」の余波でもあると考えられるのではないのでしょうか。今回の展示資料は、古墳時代後期の社会動向を示唆する興味深い資料と言えるでしょう。